

論文審査の要旨及び担当者

報告番号	甲 ㊦ 第	号	氏 名	江 崎 太 佑
論文審査担当者 主 査 泌尿器科学 大 家 基 嗣 放射線医学 武 田 篤 也 解剖学 久保田 義 顕 内科学 林 香 学力確認担当者：金井 隆典 審査委員長：武田 篤也 試問日：2025年11月25日				
(論 文 審 査 の 要 旨)				
論文題名：Concomitant Prostate Needle Biopsy and Laser Vaporization of the Prostate Could Be a Risk of Postoperative Hemoglobin Decline, a Retrospective Study (前立腺針生検とレーザー前立腺蒸散術の同時施行の安全性の検討)				
前立腺肥大症に対する手術治療である接触式レーザー前立腺蒸散術（Contact laser vaporization of the prostate: CVP）と、前立腺癌診断のための前立腺生検を同時施行した場合の安全性を、後方視的に検討した。CVPと前立腺生検の同時施行は、周術期における出血を増加させる可能性があることを示した。				
審査では、先行研究にて従来のゴールドスタンダード術式である経尿道的前立腺切除術（Transurethral resection of the prostate: TURP）と前立腺生検の同時施行が安全と結論されているにも関わらず、より低侵襲で出血が少ないはずのCVPと生検の同時施行でなぜ出血リスクの上昇が示されたのかについて問われた。TURPは電気メスによる電流の抵抗熱を利用した強力な止血法である一方、切除と止血を同時に行うことができず切除中に出血が多くなり、生検による出血の影響が相対的に小さくなる可能性があることと、先行研究が術後合併症の頻度のみを比較し、術前後のヘモグロビン（Hb）値変化というより精緻な指標を評価していないのに対して、本研究はHb値を評価することで同時生検のリスクを明らかにし、先行研究よりも詳細な検討結果を示したためと回答された。全体集団における生検同時施行症例が16例と少ないことが、結果の信頼性に与える影響について問われた。生検群が少数であることは本研究の限界であり、今後検証のため前向き試験や大規模研究を行うべきと認識するが、生検群が少数であることは、主治医が高リスク群を意識的・無意識的に選別した結果とも解釈可能であり、適応を慎重に絞った上でもなお同時生検は出血リスクを上昇させるという結論を導いたとも考えられ、得られた結果は決して軽視されるべきものではないと回答された。手術と生検を同時施行した症例と、先行して生検を行った症例の比較が必要ではないかと問われた。生検後の血尿は一般に数日以内に消退することから、この期間があれば生検による出血は十分に止血が得られると考えられ、先行した生検による出血は後日行われるCVPにはほとんど影響しないと判断したと回答された。術後Hb値5%低下という数値の臨床的重要性は小さく、逆の結論、すなわち生検同時施行は安全に行えるということが示唆されないかと問われた。5%のHb低下が重篤な転機に直結するわけではないが、同時生検で出血リスクが統計的に上昇することを示した点に意義があり、また本コホートで唯一のGrade4の血尿は同時生検群で発生したため、同時生検がまれに重篤な出血を招く可能性が示されており、同時生検を検討する際の出血リスクへの注意喚起を結論としたことは当を得ていると回答された。				
以上、本研究はCVPと前立腺生検の安全な同時施行のために重要な示唆を与えるものであり、有意義な研究であると評価された。				